

東日本大震災・熊本支援チーム事務局長 野口 修一さん(52)



未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発生から11日で2カ月。被災地支援の動きは今、世界中に広がっている。「東北の人々を助けよう」と、県内でも民間人主体の「東日本大震災・熊本支援チーム」(粟谷利夫代表、約60人)が発足し、支援に取り組んでいる。事務局長を務める宇土市議の野口修一さん(52)に、結成のいきさつや活動方針などを聞いた。

(聞き手は熊本総局・金沢 皓介)

「結成のきっかけは、大震災の発生を知って、早速、行動を起こしました」

「2人は、私を含む熊本の知人たちと連絡を取り合い、16日に支援チームが発足しました。これが発端。足、ツイッターなどで協力者を求めると、米2.5ト、飲料水4.7ト、ほかにも毛布、衣類、カイロ、カップ麺におむつなどの支援物資が続々と集まった。そして22日、約20トの物資をトラックに積み込んで仙台に向かい、そこから岩手や福島、宮城の被災地に運びました。これが最初の支援活動です。4月初めにも、現地に物資を運んでいます」

「メンバーは、どんな人ですか。」

「公務員、フリーター、会社員、学生とさまざまです。困った人を見たら、放っておけない、落ち込んだ人を元気づけたいという共通の思いを持つ人たちが集まりました。約60人のメンバーのうち、約25人が被災地に足を運んでいます」

「江戸時代には、熊本も避難所で生活する人に、なりかか物資が行き渡りませんでした。私たちはまず、こうした被災者に食料品や日用品を配ってきました」

「このほか、被災地で放置された犬を助け出し、新しい飼い主を探す活動もやっています」

「被災地では一刻と状況が変化し、被災者が必要としている物資も変わります。ですから、私たちは常に現地と連絡を取り合い、被災者の声に耳を傾けながら、支援を続けていくつもりです」

「被災地が復興し、再生するには10年以上かかるかもしれません。熊本は東北の被災地から遠く離れていても、心は近くにいる。ずっとずっと関心を持ち続けることがその第一歩だと思います」

関心持つことが第一歩

■ 細かい支援を ■

「公務員、フリーター、会社員、学生とさまざまです。困った人を見たら、放っておけない、落ち込んだ人を元気づけたいという共通の思いを持つ人たちが集まりました。約60人のメンバーのうち、約25人が被災地に足を運んでいます」

「江戸時代には、熊本も避難所で生活する人に、なりかか物資が行き渡りませんでした。私たちはまず、こうした被災者に食料品や日用品を配ってきました」

「このほか、被災地で放置された犬を助け出し、新しい飼い主を探す活動もやっています」

「被災地では一刻と状況が変化し、被災者が必要としている物資も変わります。ですから、私たちは常に現地と連絡を取り合い、被災者の声に耳を傾けながら、支援を続けていくつもりです」

「被災地が復興し、再生するには10年以上かかるかもしれません。熊本は東北の被災地から遠く離れていても、心は近くにいる。ずっとずっと関心を持ち続けることがその第一歩だと思います」



「この春休みには、福島」

「被災地では一刻と状況が変化し、被災者が必要としている物資も変わります。ですから、私たちは常に現地と連絡を取り合い、被災者の声に耳を傾けながら、支援を続けていくつもりです」

「被災地が復興し、再生するには10年以上かかるかもしれません。熊本は東北の被災地から遠く離れていても、心は近くにいる。ずっとずっと関心を持ち続けることがその第一歩だと思います」